

【新聞活用学習】全校研究・中学3年社会科

問いをもって学び、自分の考えをみいだす授業 ～思考・判断・表現する場面を生み出す手だて～

指定校2年次 須坂市立相森中学校 土屋 栄佑・米山 聡

(1) 本年度のNIE活動の概要

NIE研究指定校として2年目を迎えた本校では、今年度、下記のような内容を実施してきた。

① 校内に生徒が新聞を閲覧できる「NIEコーナー」を設置

本校では、新聞を身近に感じている生徒の割合は多くなかった。そこで、常に目に付くところに新聞がある環境づくりとして、昇降口や図書館前など、生徒がよく通る場所に新聞を設置し、閲覧できるようにした。

② 新聞を活用した授業実践を、いくつかの教科で実施

新聞を授業の中で活用できる場面について各教科で構想し、すぐに取り組める活動を実践してきた。社会科では、より研究テーマに沿った授業実践につながるよう、昨年度に引き続き公民分野での新聞を活用した実践に取り組んできた。

(2) 本年度のNIE活動の取り組み状況（4月時点）

本校は、全校生徒306名、各学年3学級の中規模校である。昨年度に引き続き、新聞に触れる機会が少ない生徒たちが、少しでも新聞を身近に感じられるよう、昇降口に「NIEコーナー」を設置した（図1）。授業で提示した記事について、足を止めて眺めている生徒の姿が見られた。

また、社会科において公開授業を行った。その詳細については（4）で触れる。

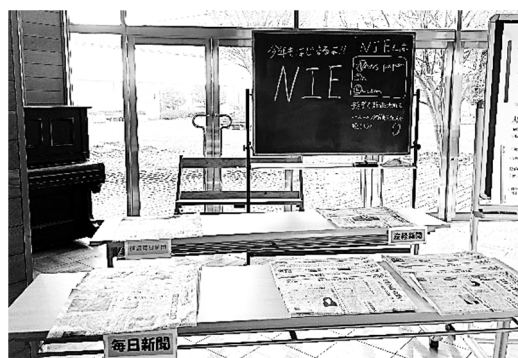


図1 昇降口に設置したNIEコーナーの黒板

(3) NIE活動のねらい

本校は、全校研究テーマを「問いをもって学び、自分の考えを見いだす授業 ～思考・判断・表現する場面を生み出す手だて～」と据えて、日々の授業改善に重点を置いて研究を進めている。サブテーマにあるように、「思考・判断・表現する場面」を授業の中で生み出す工夫をすることで、生徒が「自分の考えを見いだす」ことを目指している。その姿を実現するために、授業の中で「問いをもつこと」、「対話をするこゝと」を大切にしている。

NIE活動において、新聞を題材にすることは、生徒が授業の中で向き合うことになる「問い」の解決に向けて学びを深めていくうえで意義があると考えている。例えば、「問い」の答えを新聞記事に求めて読み深める姿や、記事を読むことを通して新たな問いに出会っていく姿などが考えられる。また、新聞の内容について取り上げ、共有することで、事象（記事）との「対話」、友との「対話」、自己との「対話」が生まれる場面もあるだろう。今年度は特に、この「共有」の場面に重点を置き、友の考えに触れることを通して自分の考えが更新できるような学習ができれば、研究テーマの姿に迫ることができるのではないかと考えた。以上のことを目指し、新聞を活用した授業実践を構想してきた。

(4) 全校での取り組み

《NIEコーナー》

昇降口や図書館前に、NIEコーナーや新聞閲覧台を設け、生徒が自由に新聞を閲覧できるようにしたり、教師が気になった記事を紹介したりした(図1・2)。



図2 図書館前の閲覧台

《英語科での実践》

①日本文化の紹介

「日本の伝統文化(もの・ひと・習慣 など)をALTに紹介する」という目的・場面・状況を設定し、日本が世界に誇れるものにはどんなものがあるか、新聞から探した。生徒は、自分が決めたテーマについて Google Form で英文を書いて教師に送信した。

②ALT新聞の作成

英字新聞のフォーマットをALTに作成してもらい、ALTに対して生徒がインタビューした内容を基に、英字新聞を作成した。読み手の興味を引くために、どのような工夫が大切か、実際の新聞のレイアウトを参考にしながら作成した(図3)。

上記の実践からは、新聞を情報源として、自らの問いの答えを求める姿や、記事の内容からアイデアを得て答えを見いだしていく姿が見られた。さらに、日本が世界に誇る文化を自分で見だし、外国人という相手意識をもちながら紹介文を書くという活動にもつながった。新聞を実際に作成することは、読み手に情報を正しく伝えようとする意識の育成につながると考え、今後も実践していきたいと考えている。



図3 生徒が作成したALT新聞

《社会科での実践》

昨年度、社会科では、公民分野で授業実践を行った。そこでは、生徒が、「自分が働くうえで大切にしたいことはどんなことか」について、ワークライフバランスや働き方の工夫について扱っている新聞記事の事例を基に、自分の考えをまとめていく授業を構想した。実際の授業では、公開授業において、12の新聞記事を生徒に与えて考えるように促した。しかし、新聞記事の量が多く、記事の内容を深めた上で自分の考えを述べることは難しかった。また、生徒の考えが多岐にわたり、授業の着地点が曖昧になってしまった。生徒の中には、関心をもった記事について自分の感想を書くという活動になってしまい、ワークライフバランスや働き方の工夫について考えることまで到達できなかった姿も見られた。

そこで、今年度は、単元全体の学びが本時に生きるような展開の工夫ができるよう、同単元を再度練り直した。また、授業終末での生徒の考えが、単なる記事への感想ではなく、働くことと生き方をつなげて考えを深めることができるよう、前時とのつながりや、考えの共有の仕方を工夫した。

※詳細は(5)を参照

(5) 公開研究授業

授業日：令和5年1月25日 授業者：土屋 栄佑

① 単元名 公民的分野 第4章「私たちの暮らしと経済」 2節「生産と労働」（全7時間）

② 単元展開の概要

第1時	<p>学習問題：資本主義を担う企業の役割を知ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資本主義経済の仕組みを大きく捉える。
第2時	<p>学習問題：企業にはどのような種類があるのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知っている企業の役割を考えることで、企業が利潤を得ることの大切さを感じる。
第3時	<p>学習問題：株式会社の仕組みを知ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・株式会社の仕組みを知ることで、利潤を得るための企業の取り組みを理解する。 <p>NIE：上場している企業の株価を知り、実際に購入を検討する企業を選択する。</p>
第4時	<p>学習問題：働く人に認められている権利にはどのようなものがあるだろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・労働基本権、労働三法などの存在を理解し、労働者に権利が認められていることを知る。
第5時	<p>学習問題：労働形態の変化とその理由について考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際競争が激しくなる世の中で多様化する労働形態について考える。
第6時 (前時)	<p>学習問題：日本の労働時間や働き方が及ぼす影響にはどのようなものがあるのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の労働時間と、それが及ぼす影響や問題点について理解する。 <p>NIE：過労により、就労不可能で自殺してしまったり、日頃の業務に追われ体調を崩してしまったりする人たちの実情</p>
第7時 (本時)	<p>学習問題：一人一人が働くときに、大切にしたいことはどんなことだろう</p> <p>(詳細は本時案にて)</p>

③ 本時案（全7時間中の7時目）

・ 本時の主眼

日本の労働は、法律や権利で働き方が保障されつつも、長時間であることや失業率が高いこと、労働環境の影響で健康に影響が及んでいるなどといった実情があることを知った生徒たちが、働く意味について考える場面で、仕事と家庭の両立を目指したり、自分や社会のために働き方を工夫したりしている実践事例を新聞記事から知り、共感できることを伝え合うことを通し、働きがいのある仕事とはどのようなことかについて多角的・多面的に考えることができる。

・ 展開

	学習活動	予想される生徒の反応	指導・評価	時
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の労働の問題点について振り返る 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の労働時間は以前よりは減っているが、それでも先進工業国の中ではまだ長いほうだ。 ・失業率が高いので、働く意思があってもそれができない人がいる。 ・法律や制度で認められていても、結局改善されないこともあるのが問題点。 	<ul style="list-style-type: none"> ・労働の問題点について、数名の生徒に発言を促し、全体で共有する。 ・出てきた問題点を踏まえ、どのような働き方がよいか問いかけ、学習問題を据える。 	3
	<p>学習問題：一人一人が働くときに、大切にしたいことはどんなことだろう。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習問題について 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は好きなことが仕事にできるように 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習問題に対する考えを 	2

展	ての考えを述べる	<p>なるといいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活が快適にできるような給料がもらえる仕事。 ・安定した収入が得られる仕事。 ・働きがいのある仕事内容が良い。 	数名の生徒に発言するように促す。	
	<p>学習課題：仕事と家庭の両立を目指したり、自分や社会のために働き方を工夫したりしている実践事例を知り、自分にとって共感できることをまとめよう。</p>			
開	<ul style="list-style-type: none"> ・①～④の新聞記事から、「共感できる仕事の考え方」を選び、PC上で考えを記入する ・記事についてのそれぞれの考えを共有する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「①」の記事では、塚原さんが社会や人のためにプリン店を経営している。自分の生き方を肯定していてすごい。 ・「②」のフリーアドレス制度のように、好きな仕事場所を選ぶことは魅力的だ。 ・「③」の託児所の、「お手伝いができたと喜びを感じた」というところが、やりがいにつながっている。 ・「④」の農業を活かしたワーケーションは、農業を活性化しつつ余暇の充実が図れる。バランスを保ちつつ働けそうだ。 ・働くことへの考え方は人それぞれだから、様々な視点で働き方を考えていかなければいけないのだな。 ・夢と現実のどちらが大切なのか考えさせられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事の切り抜きを準備し、特徴に応じた選択肢で考えていくようにする。 ・複数の記事について、思うことをフォームに記入してよいことを伝える。 ・一人一人の選択とその理由を認め、感じ方の多様性を重視する。 ・フォーム上の生徒の自由記述から、ピックアップし全体に紹介する。 	25
終末	<ul style="list-style-type: none"> ・働くうえで大切にしたいことをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことを仕事にするのはとても大切なことだが、自分の生活や家族の幸せを考えて仕事のバランスを工夫することもとても大切だと思う。 ・仕事の時間や内容がもっと自由に選べるようなものが良いと思う。 ・自分の好きなことができるような仕事時間で、収入も得やすい仕事選びをしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人かの意見を共有していく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>働きがいのある仕事とはどんなことかについて多角的・多面的に考えることができる (思考・判断・表現)</p> </div>	10

【資料 生徒に提示する新聞記事の内容】

- ① 地域社会や地元の人のために、プリン店を経営し、やりがいをもって働く塚原米子さん
- ② 働く人が場所を自由に選べる「アクティビティ・ベースド・ワーキング」を進める企業
- ③ 子育て世代の人が働けるように、理由を問わずに子どもを預かる託児所
- ④ 農ヶーション、本格スタート

(6) 生徒の反応

前時(第6時)、M生は、過酷な労働環境下で働く人々や、その影響で就労不可能になったり、過労死してしまったりした人々についての新聞記事を読み、表1のような感想を Google Form に記述した。

M生は、記事を読んで、過酷な労働状態やそれに起因する過労死などの悲しい現実に関心を寄せ、被害に遭われた方への強い共感の思いを、「自分も周りのひともそうになってほしくない」という一言に込めた。一方で、「国にどうにかしてほしい」という記述からは、「自分や当事者にはどうにもできない」というM生の胸中が表れている。

本時の冒頭、教師は、前時での生徒の考えをプリントにまとめて配布し、読んでみるように促した。その後、全体でいくつかの意見を取り上げて共有し、本時の学習問題「一人一人が働くときに大切にしたいことはどんなことだろうか」を据えた。そして、数名の生徒を指名し、それぞれの考えを述べるように促した。

「やりがい」や「環境が整っていること」など各々の考えが出される中、指名されたM生は、「夢を叶えられること」と発言した。

M生のこの発言には、自分が働きたいように、また夢の実現につながるように働くことを大切にしたいという思いが感じられる。前時の振り返りの記述からは、「国がどうにかしてほしい」と自分ではどうにもできないことだと、自分の無力さを吐露していたM生であったが、友の考えをじっくりと読み、触れることで、本当に自分が大切にしたいことをより明確にすることができたのではないかと考えられる。

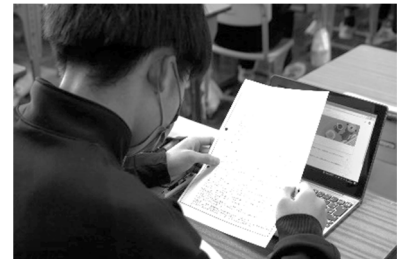
続いて教師は、一人一人の考えをさらに深めていくために、学習課題「仕事と家庭の両立を目指したり、自分や社会のために働き方を工夫したりしている人の実践事例から、自分にとって共感できることをまとめよう」を据え、4つの新聞記事を提示して、共感できる点をまとめるように促した。

M生は「記事1(図4)」を選択し、表2のように Google Form に考えを記入した。

「記事1」では、プリンの専門店を経営する塚原米子さんの取組が紹介されている。M生は塚原さんの記事を読み、「自分のやりたいこと」と「人のために働く」ことを両立させている塚原さんの生き方に共感を寄せた。そのうえで、「自分も『今、できること』をやりたい」と、自分自身の生き方や働き方への願いを持った。M生のこの記述の裏には、記事を通し

表1 前時M生が記述した新聞記事の内容に対する考え

自分も周りのひともそうになってほしくないので、国がどうにかしてほしい。



前時の友の考えを読むM生



図4 生徒に提示した記事1
信濃毎日新聞 2021年12月8日付

表2 本時M生が記述した働くことに対する考え

この記事に出てくる塚原さんは「自分のやりたいこと」としてプリン専門店を経営しているように、今まで自分がやってきたことを自分のやりたいことに生かしているということがすごかったです。そしてそれがほかの人のためになっていることにもすごさを感じ、自分も「今、できること」をやりたいと思いました。

て、塚原さんが自分のやりたいことを突き詰めて一念発起して開業したこと、これまでの飲食店での勤務経験が活かされていること、人に喜んでもらいたいという思いがあること、など、様々な背景まで含めて、塚原さんの人生を感じ取ったことが関係しているのではないかと考えられる。そして、「今まで自分がやってきたことを自分のやりたいことに活かしているということがすごいと思いました」という、人の生き方に共感する姿につながったのではないかと考えられる。また、前時の終末では、「国にどうかしてほしい」と考えを記述していたM生であったが、友の考えや塚原さんの生き方に触れることを通して、「今できることをやっていきたい」と、自分の生き方や働き方に願いをもつ姿につながったのではないかと考えられる。

M生がこれらの考えを記述したのは、前時に読んだ新聞記事に対して、友がどう感じたのかを共有することを通して、自分の考えや願いがより明確になったことや、新聞記事を読んで人の生き方に触れることを通して、自分の働き方に対する願いをもったことによるものであると考えられる。このような生徒の姿から、新聞記事を通して実際の事例に触れながら、自己の考えを深める単元を構想したことが、自己の働き方や生き方について多面的・多角的に考えることにつながったと考えられる。

(7) 成果と今後の課題

本単元は、働き方と生き方のバランスについて、生徒一人一人が願いをもつことを目指して構想した。そのために、新聞記事に見られるような、世の中で実際に起こっていることを題材として生徒に提示したことが、生きた教材という意味で有効であったと考えられる。実際に、生徒は新聞記事に深く思いを寄せ、自分の考えを明確にしたり、文章で書いたりすることができた。自分が願いをもって働き方を考えていくことの重要性を、今後、生徒自身が生きていくうえで生かしてほしいと思う。

一方で、そもそも学習問題・学習課題が、「働いた経験」のない生徒、「家庭と仕事の両立」をしたことがない生徒にとっては、現実味の薄いものであった。単元のまとまりや、前時と本時のつながりを意識して本時の学びを深められるよう、前時の意見共有から本時の導入を行い、題材も現実のものであることから、多くの生徒が真剣に考えたと思われるが、今の生徒の生活との結びつきという点では、希薄にならざるを得ない題材でもあった。キャリア教育の視点で、「働き方」という一つの事象を見つめる学習から、長いスパンで自分の生き方につなげる学習展開が有効ではなかったか。例えば、総合的な学習の時間での探求的な学習と結び付け、自分の生き方形成に生かしていく展開について、今後も研究を続け、社会科の学習が一層生徒の生き方につながるようにしていきたい。NIE研究指定校としての2年間の研究から見えてきた課題を、今後の生徒の学習に生かしていけるように、さらに深めていきたい。